

“これで王妃もギロチンへ行けるわ”

映画『ダイアナ・ヴリーランド 伝説のファッションista』

中野 香織

大学でファッション文化史という講座を持っているのですが、自分のファッション史の語り方に関して、ときどき、うっすらと引け目と疑問を感じることもあります。というのも、ベル・エポックを語るときはパリとロンドン、20年代はアメリカ、30年代はドイツ、40年代は日本、50年代はアメリカ、60年代はイギリス、70年代はフランス……というふうには、時代を語るのにもっとも「語りどころ」の多い場所を選び、歴史の起る舞台を気ままに転換しているからです。私としては、聴衆にもっともファッション史に興味をもちたいというアプローチとしてそのようにしているのですが、このようなアプローチは、いわゆる「学術的」な視点からは、「いいかげん」なものに映るだろうと思いでいたフシがあります。定点を決め、そこで起きた事実のみを確実に検証しながら誇張なしに語り継いでいくのが、本来、「正しい」歴史の語り方であろう、と。

もちろん、その「正しさ」には変わりありません。でも、このドキュメンタリー映画を観て、その引け目から解放され、自由になることができました。服装史とは一線を画するファッションの歴史は、ファッションの歴史でもあるのだ、と信じてきたからです。ファッションとはすなわち、ファクト（事実）とフィクション（虚構）の合成語で、本ドキュメンタリーのなかに登場し、私がいちばん感銘を受けたことばです。

『ダイアナ・ヴリーランド 伝説のファッションista』は、『Harper's BAZAAR』で1940年代、50年代にカリスマ編集者として25年間活躍したあと、62年以降にはUS版『VOGUE』の編集長として君臨、その後メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュートの顧問に就任して前例のない衣裳展を数多く成功させた20世紀ファッション界の女帝、ダイアナ・ヴリーランドの伝記ドキュメンタリー映画です。

ドキュメンタリー、ということになっていますが、正確な事実のみで構成されているわけではないという点で、「フィクション」です。たとえば、ヴリーランドが休日二人の息子と庭に座っていたら、上空をチャールズ・リンドバーグのスピリット・オブ・セントルイス号が飛んでいったというヴリーランドの語り。大西洋単独飛行を初めて成功させた飛行機が自宅の上空を飛んだことは幸運のしるしなのよ！というふうなニュアンスで彼女は誇らしげに語るのですが、実はヴリーランドの家はその航路からはまったくはずれたところにあるとのこと。でも、彼女の人生にとっては、リンドバーグが単独飛行を成功させたというファクトに、自宅の上空を飛んだというフィクションを加えて、フィクションを創作し、それによって自分の歴史をエキサイティングなものとして面白く語ること、そっちのほうがはるかに重要な「真実」なのです。

退屈な事実を虚構を練りまぜてフィクションを創作する、という自由な想像力に支えられた能力は、自分史を面白くするためのだけでなく、ファッション史そのものをエキサイティングにするためにも発揮

されます。たとえばコスチューム・インスティテュートで18世紀の衣裳展を行なったときの、「盗り髪」の演出。「正確な」プロポーションを再現しても、たんなる懐古趣味の域を出ず、誰の心も動かしません。であれば、それを誇張する！誇張はこの場合、フィクションというよりもむしろ、マジックに近い。当然、正確を期する学芸員からは、眉をひそめられます。しかし、あえてリスクを冒してそのように魔法をかけられた歴史的な衣装は、人を驚かせ興奮を与え、結果、それまで退屈と思われていた衣裳美術展に人が大挙して詰めかけるという前代未聞の現象を巻き起こします。想像力の翼を奔放に広げたフィクションの力によって、初めてファクトそのものにも光があたるわけですね。フィクションの力なしでは、見向きもされず、ファクトそのものが消えてしまう。「これで王妃

かなフィクションに仕立て上げ、陽気に攻撃的に世に問い続けていきました。それによって、人々が熱に浮かされ、流行がグローバルに広がり、時代が加速していくさまを見るのは、なんとスリリングなことでしょう。

「ひと」に対しても、ヴリーランドはそのような「フィクション」をフルに発揮します。無視されていたり、醜いとされがちであった欠点を持っていたりするモデルや歌手を、世にも魅力的なスターの高みへと引き上げます。唇ぼつりミックス・ジャガーはそれを強調し、鼻の長いバーブラ・ストライザンドはあえて横顔を撮り彫刻や絵画の王妃のように見せ、ベネトネ・トゥーリーはその「へんな顔」を生かし、シエールを登場し、彼らを一夜にしてスターに仕立て上げていきます。欠点はチャームポイントになる。人を魅了

する美しさのために必要なのは美貌ではなく、想像力のマジックである。それが真実であることを知らしめてくれる模範例を次々と見せられるうちに、ヴリーランドのマジックに人間の存在そのものを讃える神の寛容まで感じとってしまい、静かな感動が広がっていきます。

そんなこんなフィクションの事例に目を見張りつつ、存在そのものがフィクションであるようなヴリーランドの生涯をたどり終えた晩に、確信するのです。フィクションとは、フィクションなのだ。退屈な事実には、怖れることなく大胆に想像力のマジックを働かせ、人に新鮮な驚きを与えるフィクションを創りあげること。それこそがフィクションなのだ。

ぎりぎりの冒険を、威厳をもってやり遂げたエキセントリックな女帝ですが、実は、私よりも彼女に親しみを抱いた瞬間は、夫に対するはにかみを結婚40年以上経っても持ち続けていた、と語るくんだり。なんてかわいらしいでしょう！これも「演出」かしらといふかりながらも、でも、本心でも演出でも、これだけのフレッシュな驚きがあればもはやどっちでもいいわと思っている自分がすでにいます。

ずぶの素人から、「やってみない？(Why don't you try it?)」のひとことに応え、編集の世界へ入ったヴリーランド。その成功の秘密は、並はずれたフィクション創出力でした。この映画は、その華々しい実例にいろどられた20世紀ファッション史を楽しませると同時に、富も美貌も乏しく生まれてきた人間が、豊かでオリジナルな人生を創りあげていくためのヒントをたっぷりと与えてくれます。個人的には、ルイ16世を心安らかにギロチンに送り、オスカー・ワイルドを無事、牢獄に送り届けるための勇気をいただきました。



©MAGO MEDIA, INC. ALL RIGHTS RESERVED

もギロチンへ行けるわ！」というセリフの、震えるようなかっこよさときたら。

そもそも、20世紀のファッション史を構成する、多くの事象そのものの陰にも、ヴリーランドの「フィクション」があったことが、この映画でわかります。ビキニ、ブルー・ジーンズ、ローレン・バコール、ミニスカート&ツイギー、モデルのヌード写真、モノロ・ブランク、黒タイツにベタンコ靴……。現在にもつながるあれやこれやの事象やアイテムの起源には、必ずダイアナ・ヴリーランドの強力なプッシュがありました。ありのままの現象としては誰も面白いとも美しいとも思わないファクト。そこにヴリーランドは目をつけ、大胆にファンタジーを加えて、艶や

PROFILE

東京大学大学院修了後、英ケンブリッジ大学客員研究員を務め、文筆業。現在、エッセイスト・明治大学国際日本学部特任教授。過去2000年分の男女ファッション史と現代モード事情を幅広い視野から研究。数多くのメディアで執筆およびレクチャーを行なっている。著書に「モードとエロスと資本」(集英社新書)、「ダンジムの系譜 男が憧れた男たち」(新潮選書)ほか多数。

「ダイアナ・ヴリーランド 伝説のファッションista」

- 監督・製作：リサ・インモルディーノ・ヴリーランド
- 出演：ダイアナ・ヴリーランドほか
- 提供：シネマライズ ●配給：シネマライズ×キタガ
- 2012年12月22日(土)シネマライズ、TOHOシネマ六本木ヒルズ他全国順次ロードショー!!